

論文の内容の要旨

論文題目 流動と生成—スールー海域世界の民族誌

氏名 床呂郁哉

本論文「流動と生成—スールー海域世界の民族誌」は筆者のフィールドであるスールー海域世界（後述）における人やモノ、文化の多様な流動（または移動・越境）と、その流動に伴って現地で生起している社会・文化的な持続（再生産）と生成（変化）について、文化人類学的な視点から記述と検討を行うことを主な目的としている。本論文は主にスールー海域世界における筆者のフィールドワークによって得られた資料を中心とするが、また歴史的背景の分析などに関しては欧米を含む各地で収集した文献資（史）料等も必要に応じて参照している。以下に本論文の各章ごとの概要について述べる。

まず第1章は序論として本論文の主題であるスールー海域世界における各種の人やモノ、文化の流動を論じるに当たって必要な人類学や隣接分野における理論的参照枠組みと先行研究に関するレビューを実施しながら本論文の位置づけと意義を述べる。これに続く第2章と第3章では、本論文の対象であるスールー海域世界の社会の歴史的背景について述べていく。この作業は現在のスールー海域世界における人やモノの流動（移動、越境）との連続性と非連続性を理解する上でも重要な作業である。

このうち第2章では、「スールー海域世界の歴史的動態」と題して、同地域の歴史的背景のうち、主に前植民地期におけるスールー王国を中心としたスールー海域世界における社会形成の動態について、近年の歴史学の新たな知見や当時の歴史的背景に関する文献資（史）料も参照しながら具体的に検討していく。

次の第3章では、スールー海域世界における伝統的な人やモノの流動やネットワークが、19世紀末から20世紀前半にかけての植民地化の過程で、国境をはじめとする様々な「境界」の設定によって分断・再編されていく過程について論述していく。

続く第4章と第5章は、現在のスールー海域世界を舞台とする人やモノ、文化の流動の諸相をよりミクロな民族誌的水準から記述していく。まず第4章では、「越境の民族誌」と題して、現代のスールー海域世界での多様な人やモノの流動の実態について主に筆者のフィールドワークを通じて得られたデータに基づいて記述していく。その過程で、交易商や海賊といった現代の海の民が、近代国民国家の制度である国境とどのように関わり、交渉しているのかという点に関しても、考察を加えることとしたい。

次の第5章では、前章に引き続き人の流動について述べる。とくにこの章では、スールー海域世界のなかでも、伝統的に海上での移動生活を営んできたサマ（サマ・ディラウト）人を取り上げて、そのいわゆる「漂海」生活の実態などについて記述していく。

以上のように第4章と第5章が現地における流動の諸相を扱ったものであるのに対して、続く第6章と第7章はそうした流動状況下における文化の問題を主題として扱う。まず第6章では、第5章までの考察を踏まえて、高い移動性・流動性を特徴とするようなサマ人の社会において、こうした流動性の高さにもかかわらず、いかにして現地の当事者たちが一定の文化・社会的なまとまりを持続し、再生産している（かのように見える）のか、という問題に関しての検討を行う。こうして第6章が、どちらかと言えば流動状況下における文化の持続（再生産）の側面にまずは焦点を当てるのとは対照的に、次の第7章は流動状況下における文化の変化・変容や生成的な側面をより中心的に主題化して扱うものである。具体的には、近年のイスラーム世界におけるグローバルな傾向であるイスラーム復興の顕在化や、グローバルな資本主義の浸透に関連した国境を超える大量移民など、各種の流動状況の拡大・進展下における現地の宗教的実践、とくにシャーマニズム儀礼の変容や、イルムと呼ばれる秘儀的知識の生成・流通の事例を取り上げて記述と考察を行う。

こうして第6章と第7章を併せることによって、本論文の後半では現在のスールー海域世界における流動状況下での文化の持続・再生産という側面と、他方ではその変容や生成の側面、という複雑で重層的なプロセスが同時進行する状況を検討していくこととなる。

また最後に、本論文の結論となる第8章では、それまでのスールー海域世界に関する個別具体的な叙述を整理するとともに、こうした流動状況のなかでの社会・文化的な再生産と生成・変容という現象について、より一般的・理論的な水準から総括し、本論文の結論とする。